

13. 軟部組織転移巣に骨シンチグラフィで異常集積を認めた2症例

三原 太 仲山 親 榊原 成純
中田 肇 (産医大・放)
膳所富士男 (同・一外)
北原 淳詞 (同・泌尿)

S 状結腸癌 (well differentiated adenoca. with mucus production) の腹壁転移巣と卵巣癌 (papillary serous adenoca. with numerous psammoma bodies) の腰部転移巣に、 ^{99m}Tc -MDP の異常集積を認めた2症例を報告した。両転移巣とも CT にて、内部に石灰化による high density を認めた。前者は組織学的に転移と証明された病巣内の石灰化であった。後者については組織学的検討はなされていないが、多数の腹腔内転移巣ならびに腹壁転移巣内に石灰化を伴っていることが組織学的に証明されており、一連のものと考えられた。そしてこれらの石灰化が、 ^{99m}Tc -MDP の異常集積に関与したものと思われた。

14. ^{131}I -MIBG scintigraphy の臨床的意義について

辻 明德 富口 静二 古閑 幸則
下村 修 坂本 祐二 松岡 葉子
七川 静渡 広田 嘉子 高橋 睦正
(熊大・放)
大石 誠一 (同・三内)

当科で昭和 58 年 11 月より行った 12 例の ^{131}I -MIBG scintigraphy について報告した。症例は褐色細胞腫 4 例、褐色細胞腫術後 4 例、正常 3 例、神経芽細胞腫術後 1 例であり、診断率、正常部位の uptake、興味ある症例について検討した。結果は以下のようになった。

1) 褐色細胞腫の診断率は sensitivity 86%, specificity 100%, accuracy 91% と良好な結果を得た。

2) 正常部位の uptake は、唾液腺、心臓に淡い uptake が、肝・膀胱にははっきりとした uptake が、脾にその中間程度の uptake が認められた。

3) Sipple 症候群の例では、甲状腺髄様癌への uptake が示唆され、悪性褐色細胞腫の例では転移巣の発見に有用であった。

15. リンパ管内直接注入法による RI リンパ造影

溝口 直樹 星 博昭 陣之内正史
月野 治明 長町 茂樹 楠元志都生
楠原 敏幸 渡辺 克司 (宮崎医大・放)

リンパ管内に直接 RI を注入し RI リンパ造影を行った。対象とした症例は泌尿器系腫瘍 6 例、悪性リンパ腫 3 例、早発性リンパ水腫 1 例の合計 10 例である。全例通常のリンパ造影でリンパ節転移の所見はみられなかった。このうち 5 例は通常の皮下注による RI リンパ造影を併用した。方法は両足背リンパ管より ^{99m}Tc -レニウムコロイドを 10 mCi ずつ注入、3～5 時間後にガンマカメラ (LFOV, Maxi Camera 400T) にて撮影した。RI 直接注入法による RI リンパ造影は、5 例において鼠径部、骨盤部または大動脈部リンパ節の描出が得られなかった。皮下注入法を併用した 5 例について比較すると、リンパ節描出能は皮下注入法がすぐれていた。

16. ラット炎症巣における ^{67}Ga -citrate, ^{111}In -chloride の取り込みについて

檀浦龍二郎 白井 茂夫 菊池 茂
鷺渕 雅男 森田誠一郎 大竹 久
(久大・放)

S. aureus, テレピン油により炎症病巣作成後、 ^{67}Ga , ^{111}In を腹腔内投与し、起炎後 1, 3, 7, 14 日目の scintigram, 全身 autoradiogram, 炎症病巣の macroautoradiogram, 病理組織像について比較検討した。 ^{67}Ga と ^{111}In の炎症病巣への集積にあまり差を認めなかった。テレピン油では 1 日目には炎症病巣は非限局性であるが、3 日目より限局性となり、14 日目には炎症病巣の縮小をみた。*S. aureus* によるものでは、炎症病巣が限局しにくい傾向がみられた。RI の集積はともに炎症 3, 7 日目に強くみられた。病理組織では *S. aureus* は炎症初期には多核白血球の浸潤が強く、中～後期では単核球が浸潤する。テレピン油では炎症初期より多核白血球に加え、単核球の浸潤がみられ、RI 集積は細胞浸潤の著明な部分に強くみられた。